

令和元年度自然保護委員総会 第43回山岳自然の集い 宮城県大会 実施報告

自然保護委員会

令和元年度公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会（以下、JMSCA）自然保護委員総会（第43回山岳自然保護の集い宮城県石巻大会）を、11月9日（土）～10日（日）、宮城県石巻市鮎川町の牡鹿保健福祉センターを会場に、宮城県山岳連盟（以下、宮城岳連）の主管のもと、22都道県から96名の参集を得て開催した。

第一日目には「東日本大震災からのグリーン復興 次代につなげる山岳自然環境」を大会テーマに、未だ大津波の爪痕が残る鮎川浜港を望む高台に建つ会場にて、委員長会議、開会式、基調講演、総会議事を、夕刻には会場を「ホテル ニューさか井」に移し懇親会を、翌第二日目に鮎川浜港の沖合に浮かぶ「金華山」に渡り島内巡検を行った。連日の好天に恵まれて、盛り沢山の大会プログラムの二日間を順調に消化した。

（第1日目）

総会に開始に先立って参加都道県の自然保護委員長を集めた委員長会議が行われ、松隈自然保護委員長からの進行と議事内容についての説明のあと、出席者の自己紹介を行い、総会開会式へとつなげた。

山田貞道宮城岳連副会長の司会で始まった開会式では、青柳武三宮城岳連顧問の開会宣言、吉田弘司会長の主管挨拶、JMSCA 安藤武典理事と松隈豊自然保護委員長の主催挨拶、開催地からの来賓として、鮎川まちづくり協会代表理事齋藤富嗣氏の地元歓迎挨拶と、石巻市牡鹿総合支所の大窪茂久氏から石巻市からのメッセージが代読され、大会のプログラムが進行した。

村上美智子宮城岳連副会長から、金華山の自然の精通者として、基調講演の講師の中静透（なかしずか）総合地球環境岳研究所プログラムディレクターが紹介され、「金華山の森との会話」を演題に1時間の講演が行われた。概要は次の通り。

（基調講演概要）

金華山は山頂部がブナ、中腹がシデ、急斜面の

尾根にモミと分布しているが、それらの稚樹が失われ、森林の後継樹が育たず、植生が草原化へと遷移するなど、森林環境が衰えている。この原因の一つにはシカの採食に依る稚樹の損失と考えられ、その証として、シカが食べない棘や有毒の草本が占めている。戦後の旧米軍が行った鹿猟や冬季の異常寒冷などの影響から、一時的に生息数に減少の兆候があったが、金華山ではシカを「神鹿」と扱う古来の信仰から特別に保護されて来て、捕獲などによる頭数管理が難しい状況にある。一方、樹木に対する病害虫の影響も顕著で、海岸林では枯損被害が目立つ。

総じて、島内の森林は傷つき、自然環境が衰退を辿っている。

シカには良いところもあるが、生態体系全体で見れば問題が多い。シカが神事とも関係しており、黄金神社の境内でも身近に接することができ、人との関係を見るには格好の場所とも言える。

「明日の巡検ではこの講演を参考にし、金華山の自然回復への思いを感じて頂きたい。」と結んだ。

第1日目の午後のセッションの冒頭、地元 NPO 法人 **FIRST ASCENT JAPAN** 白井リカ副理事から大会テーマの説明が行われた。金華山は、歴史価値、自然環境、シカの食害、災害復興等々と課題が山積するとし、「《グリーンの復興》をキーワードに環境問題を考えよう。」とした。

引き続き行われた総会議事では、事業報告、委員会の体制、自然保護指導員の登録状況のそれぞれについて JMSCA 自然保護常任委員から説明、次いで、参加団体毎に年間活動状況の発表が行われ、質疑が交わされた。

夕食を兼ねて行われた懇親会では、青沼武三宮城岳連顧問が開宴の発声と、JMSCA から坂口三郎顧問・田中文男顧問・中嶋正喜監事、宮城岳連から吉田弘司会長・青沼武三顧問による鏡割りで宴が始まった。歓談が進む中、参加団体の順番のスピーチで盛り上がった。

(第2日目)

明けて10日、鮎川港から金華山へ渡船し、宮城岳連スタッフのリードで10時前後から4時間ほど島内を巡検し、島の自然を体感した。

金華山港帰着したあと、その場で閉会式を行い解散し、渡船に分乗して鮎川港に戻り各自の帰路に就いた。
(文責 松隈 豊)



総会議事後の集合写真



総会議事の様子